

「後ろ向き観察研究による後頭蓋窩脳転移に伴う閉塞性水頭症に対する定位放射線治療(ガンマナイフ治療)の早期治療効果の実態調査」に関する「お知らせ」と「お願い」

現在、当院脳神経外科において、「後ろ向き観察研究による後頭蓋窩脳転移に伴う閉塞性水頭症に対する定位放射線治療(ガンマナイフ治療)の早期治療効果の実態調査」を実施しております。

皆様のご理解、ご協力の程よろしくお願い申し上げます。

1. 研究の対象

後頭蓋窩に画像上転移性脳腫瘍を認め、腫瘍あるいは腫瘍周囲浮腫により脳室が圧迫され閉塞性水頭症を呈しており、それに対して定位放射線治療(ガンマナイフ治療)を受けられた方。

2. 研究の目的・方法

一般に後頭蓋窩脳転移の割合は転移性脳腫瘍全体の約 15-25%とされ、後頭蓋窩脳転移の約 8%で閉塞性水頭症を認めるとされています。後頭蓋窩脳転移症例は脳腫瘍および水頭症による頭蓋内圧亢進に伴い神経症状の悪化を来し日常生活動作低下の要因となっています。また後頭蓋窩脳転移は髄膜癌腫症の発生率がテント上と比較して高く(後頭蓋窩;約 15-40%、テント上;約 5-10%)、また後頭蓋窩脳転移に対する開頭術後の髄膜癌腫症の発生率はテント上と比較して高いとされ(後頭蓋窩;約 25-67%、テント上;約 0-17%)、転移性脳腫瘍において後頭蓋窩脳転移は予後不良因子とされています。一方で後頭蓋窩脳転移に対する定位放射線治療後の髄膜癌腫症の発生率は約 6.5%と比較的低値とされています。このため後頭蓋窩脳転移に対しては定位放射線治療による腫瘍縮小効果ならびに早期の水頭症改善効果が期待されています。

転移性脳腫瘍に対する治療法の 1 つとして、低侵襲で高い治療効果が期待できる定位放射線治療(ガンマナイフ治療)に関する報告は数々見受けられますが、後頭蓋窩脳転移に対して治療を行い腫瘍縮小に伴う早期の水頭症改善の効果を論じた報告は極めて少なく、今回は当院での治療例の治療成績を後ろ向き観察研究として解析しその治療効果および安全性について検証します。

具体的には過去のカルテからデータを収集し、治療後の水頭症改善率、転移性脳腫瘍の腫瘍制御率、放射線障害発生率、生存期間、日常生活動作維持期間などの解析および、それぞれに関与する因子の解析を行います。

研究期間は2019年11月から2020年11月までの1年間です。

この研究を通じて非小細胞肺癌からの脳転移に対する定位放射線治療(ガンマナイフ治療)のさらなる治療効果の向上が期待され、その結果を医学界全体に発信出来る可能性があるものと考えます。

3. 研究に用いる試料・情報の種類

治療のデータおよび治療前後の臨床および画像所見の経過を臨床データとして使用します。なお紹介いただいた紹介元病院から臨床データを取得する場合があります。

4. 外部への試料・情報の提供

研究のために使われる病気や身体の様子、生活の様子についての試料・情報は匿名化し、個人が特定されない状態で本研究終了後も適切に管理、保存します。それらは研究目的

以外には一切使用しません。

試料・情報は研究責任者が管理し、特定の関係者以外がアクセスできない状態で行います。
対応表は、研究責任者が保管・管理します。

5. 研究組織

横浜労災病院 脳神経外科・脳定位放射線治療センター

6. お問い合わせ先

本研究に関するご質問などがありましたら下記の連絡先までお問い合わせください。
ご希望があれば、他の研究対象者の個人情報及び知的財産の保護に支障がない範囲内で、研究計画書及び関連資料を閲覧することが出来ますのでお申し出下さい。
また、試料・情報が当該研究に用いられることについて患者さんもしくは患者さんの代理人の方にご了承いただけない場合には研究対象としませんので、下記の連絡先までお申し出下さい。その場合でも患者さんに不利益が生じることはありません。

照会先および研究への利用を拒否する場合の連絡先：

研究責任者・代表者：

〒222-0036

神奈川県横浜市港北区小机町 3211

横浜労災病院 脳神経外科・脳定位放射線治療センター

周藤 高

松永 成生

小林 夏樹

電話番号：045-474-8111(代表)